

第 20 回クラシックを楽しむ会

2015 年 4 月 26 日 (日) 18:00~21:30

歌劇「サムソンとデリラ」(サン・サーンス)

会場等：メトロポリタン歌劇場

1998 年 9 月 28 日

ドミンゴ、メトロポリタンデビュー30周年記念公演

楽団等：メトロポリタン歌劇場管弦楽団

同合唱団

指揮：ジェイムズ・レヴァイン

演出：イライジャ・モシンスキー

装置・衣装：リチャード・ハドソン

出演：プラシド・ドミンゴ (サムソン)

オリガ・ボロディナ (デリラ)

セルゲイ・レイフェルクス (ダゴンの大祭司)

ルネ・パーペ (老ヘブライ人)

リチャード・ポール・フィンク (太守アビメレク)

バーナード・フィッチ (第一のペリシテ人)

アルフレッド・ウォーカー (第二のペリシテ人)

チャールズ・アンソニー (ペリシテ人の使者)

その他



ペリシテ人の太守アビメレク



復讐を誓いあうデリラと大祭司



デリラに誘惑されるサムソン

物語のストーリー

旧約聖書の時代、ペリシテ人が支配するパレスチナのガザ。古代イスラエルの士師 (しし) サムソンは神から授かった怪力の持ち主。奴隷にされているヘブライ人を励まし、ペリシテ人の太守を殺害して英雄となる。サムソンはペリシテ人の美女デリラに心を奪われ、怪力の秘密が髪にあることを洩らして髪を剃られる。怪力を失ってペリシテ人に捕えられるが、ダゴン神殿で生贄にされる前に怪力を取り戻し、神殿を崩壊させてペリシテ人を道連れに壮絶な最後を遂げる。

このオペラは

サン・サーンスの唯一の成功オペラで、フランスの代表的なグランド・オペラ。メゾ・ソプラノを主役に配したことで先駆的。このオペラは当初オラトリオとして作曲に着手したため、合唱の効果などオラトリオ風の性格を持つ。

見どころ・聴きどころ

デリラの3つのアリア、特に第2幕の「あなたの声に私の心は開く」と、第3幕のバレエ「バックナール」は単独でもよく演奏される。最後の**神殿崩壊**は舞台の見せ場としても有名。

第 21 回クラシックを楽しむ会(予告)

タイトル：歌劇「カルメン」(ビゼー)

5月24日(日) 17時30分開場、18時上映開始

巨匠ゼッフィレッリ演出のヴェローナ野外劇場公演(2014年6月)。ロシアのメゾソプラノ、エカテリーナ・セメンチュクがカルメンを歌う。本物の馬も登場。

6月以降、「椿姫」など定番歌劇の他、「ランメルモールのルチア」、「夢遊病の女」などを予定。

あらすじ

時と場所

紀元前 12 世の中ごろ、パレスチナの都市国家ガザ。

登場人物

サムソン	ヘブライ人の士師、神から与えられた怪力の持ち主
デリラ	ペリシテ人の美女
大祭司	ガザのダゴン神殿の高僧
アビメレク	ガザの太守
老ヘブライ人	

【第 1 幕】パレスチナのガザの広場

ペリシテ人に支配され奴隷にされていたヘブライ人達は、ダゴン神殿の広場に集まって民族の境遇を嘆き神に救済を祈っている。怪力の若者サムソンが進み出て神を信じて戦おうと呼びかける。ガザの太守アビメレクが現れてヘブライ人の神を侮辱し、サムソンを殺そうとして逆に剣を奪われて殺される。

ダゴン神殿から大祭司が現われ激怒するが、サムソンの怪力に怯え街を捨てて山の中に逃げる。

サムソンとヘブライ人が勝利と開放を神に感謝しているとき、ダゴン神殿から妖艶なデリラが巫女達と現れて歌と踊りでサムソンを誘惑。サムソンはヘブライの老人に「誘惑に負けると破滅する」と忠告されるが、次第にデリラに惹かれていく。

【第 2 幕】パレスチナ、ソレクの谷のデリラの家

デリラは復讐のため隠れ家でサムソンを待っている。そこに大祭司がきてサムソンの弱点を探るよう依頼され、手を組むことを誓う。

サムソンが現われ、誘惑に負けて「デリラ！お前を愛している！」と叫ぶ。デリラは喜び「**あなたの声**に心は開く」を歌うが、「秘密を教えて」というデリラの問いには頑として応じない。（しかし最後にはデリラの涙にほだされ秘密を漏らす。サムソンは髪を剃られて無力に。）サムソンの悲痛な声「裏切ったな！」の叫びとともに、デリラの合図を待っていた大祭司とペリシテ兵士が家に乱入する。



髪を切るデリラ（ルーベンス部分）

【第 3 幕】ガザの牢獄、ダゴン神殿の中

ガザの牢獄。捕えられたサムソンは、両眼をえぐりとられ、石臼を挽く刑に処せられている。遠くから囚われたヘブライ人達の「女の色香に迷って同胞を裏切った」という叱責の声が聞こえる。

場面は変わってダゴンの神殿の中。ペリシテ人たちが勝利の宴を始め華麗な「**バックナール**」の音楽に合わせて官能的な踊りを繰り広げる。

サムソンが少年に手を引かれて神殿に現れる。大祭司は彼を侮辱、ペリシテ人は嘲笑。デリラは偽りの愛で復讐を成就したと得意げに歌う。ダゴン神をたたえ大いに盛り上がる。



目を潰されるサムソン（レンブラント部分）

サムソンは少年に神殿中央の柱のところへ連れて行くよう頼む。彼は最後の願いを神に祈り、渾身の力をこめて柱をゆする。怪力が蘇り柱は真っ二つに裂け、神殿は阿鼻叫喚のなか轟音と共に崩壊。

出演者について

メゾソプラノ歌手**オリガ・ボロディナ**(1963-)とバリトン歌手**セルゲイ・レイフェルクス**(1946-)は共に、ソ連（ロシア）のレニングラード（サンクトペテルブルク）出身、しかも共にキーロフ・オペラ(マリインスキー劇場)を代表する世界的なオペラ歌手。そしてボロディナはデリラ役以外にアムネリス役など、レイフェルクスはアビメレク役以外にイヤゴ役、スカルピア役など、共に敵役で人気を博している。

バス歌手**ルネ・パーペ**(1964-)はドイツのドレスデン出身、ザラストラ役でお馴染み。

装置・衣装のリチャード・ハドソンはミュージカル「ライオン・キング」舞台美術家としても有名。

参考

ヘブライ語聖書(=ユダヤの聖書、キリスト教では「旧約聖書」)

紀元前4世紀までに書かれたヘブライ語とアラム語(アラム人が普及させた国際語)の文書群。**律法**(創世記、出エジプト記などモーセ五書)、**預言書**(士師記、エレミア書など歴史書と預言者物語)と**諸書**(詩篇、箴言、エレミアの哀歌など)からなる。キリスト教の「旧約聖書」と内容は同一。

古代パレスティナ、サムソンとデリラの時代の前後

カナン人が住んでいた東地中海沿岸「カナンの地」は、**新王国**時代の**古代エジプト王ラムセス2世**(出エジプト記の時代)が支配していたが、紀元前12世紀頃「海の民」の一派**ペリシテ人**が上陸し**ガザ**などに都市国家を作って定住。後の古代ローマ帝国によって「ペリシテ人の土地」を意味する「**パレスティナ**」と呼ばれることになった。士師記の物語「**サムソンとデリラ**」の時代の後、前11世紀末**ヘブライ人**の**ダヴィデ王**がペリシテ人を倒し、部族を統一して**古代イスラエル王国(ヘブライ王国)**を建国、前10世紀にはダビデの子、**ソロモン王**が「**ソロモンの栄華**」を現出。「**士師**」とは王国成立前の古代イスラエル部族連合共同体のカリスマ的指導者。



海の民の活動<伊藤義典『古代ギリシアの歴史』p.76>

ペリシテ人、ダゴン神

ペリシテ人は、はじめて鉄製武器を使用した**アナトリア**(トルコ東部)の**ヒッタイト**を滅ぼした「**海の民**」の一派で、製鉄技術をパレスチナに伝えた。**ダゴン神**を信奉して**ガザ**に巨大な神殿を建てたが、士師記によれば、サムソンにより神殿は崩壊、サムソンと3,000人の信者が死んだ。ペリシテ人による記録はない。勝者のユダヤ教、キリスト教の「聖書」によりダゴン神は邪神、邪教とされた。

古代イスラエル人(=ヘブライ人)、唯一神の名前

古代イスラエル人は他民族からはヘブライ人と呼ばれた。彼らはペリシテ人上陸と同時期に東部山岳地帯から「カナンの地」に侵入して来たが、出自は様々と考えられている。唯一神「**ヤハウェ**」(台本は *Jéhovah*、文語訳はエホバ、口語訳は「主」、「神」など)を信仰する部族がまとまって古代イスラエル部族連合が形成されたとされる。

補足.

旧約聖書の物語とオペラ

士師記の13章~16章に士師サムソンが登場する。

13章**サムソンの出生**。ペリシテ人がイスラエル人を支配している。マノアの妻の前に、御使い(主の使者)が現れ、不妊の彼女が神にささげられた男子を産むこと、生まれたら頭に剃刀を当ててはならないこと、その子がイスラエルを救うことを告げる。誕生した男子はサムソンと名付けられる。

14章**サムソンの結婚**。サムソンはティムナに住むペリシテ人の女と結婚する。サムソンとティムナの人々は陰悪となり、サムソンの妻は、彼女の父によって他の者に与えられる。

15章**サムソンの凶暴**。サムソンは報復に次ぐ報復で千人のペリシテ人を殺す。

16章前半**デリラによるサムソン剃髪と捕縛**。サムソンは、自分の力の秘密をソレクの谷に住むデリラに明かして髪を剃られる。怪力を失い、ペリシテ人に捕らえられ両目をくり抜かれる。

16章後半**怪力回復と神殿崩壊**。三千人のペリシテ人がダゴンを崇拝するために集まり、サムソンを見世物にしようとするが、力を回復したサムソンは神殿の柱を倒し、ペリシテ人を巻き添えにして神殿の下敷きとなった。こうしてサムソンが死ぬときに殺した人数は生きている間に殺した人数より多かった。

オペラは16章の物語が中心になっているが、サムソン剃髪と目潰しは舞台の外で行われる。

その他

「**太守**」、「**大祭司**」は聖書以外にペリシテ人の記録がないため史実の肩書きではない。

「**バックナール**」はローマ神話の豊穡と葡萄酒の神**バックス**(*バックス*)を称える酒宴の踊り。バックスはギリシャ神話の**ディオニソス**。その妻がペリシテ人の出身地と目される**クレタ島**の王女**アリアドネ**。